

⑫ 前記田村氏論文参照。

⑬ なほ泰和六年(一一〇六)にも度牒・名額・師號等を賣出したことがある。當時山東路地方は連年の旱蝗に見舞はれて救済切に急を要するものであつたが、國の財貨多く軍費に用ひられて饑飢救済にこれを用ひ得なかつた。時に山東路安撫使張萬公の策によつて度牒等の賣出しを行つてこれが資金にあてた(『金史』卷九五張萬公傳)。

⑭ 『金史』卷一四宣宗紀・同卷五〇食貨志参照。

### 梁傳所見の交州に關す

#### る佛教記事

梁高僧傳中、交州に關係ある佛教記事を探して見ると先づ、康僧會は「其の先康居の人で、世々天竺に住したがその父商賈に因りて交趾に移る。」と見え、彼が十餘歳の時二親並びて死去し、孝情切なるにより服畢りて出家したとあるから、三國の吳に佛教を弘布した康僧會は實に交趾の出身である。又晉の竺慧達卷四の傳には交州合浦の人董宗之が海底に珠を探り金の佛像を得たことを載せてゐる。

南朝時代交州は印度と江南との交通の要地となり、例へば、晉の于法蘭は、遠く西域に適き異聞を求めんと欲し、交州に走りて疾に遇ひ、象林に終り、又于道遂も敦煌の人であ

るが、法蘭に隨行し西域へ行く途中交趾で疾にかゝり三十一歳で死んだ又、天竺の僧が支那に來るにも、道交州をへた。有名なる覺賢(佛駄跋陀羅)は罽賓に在りしころ支那に遊方弘化の志を立て、葱嶺を度り、印度諸國をへて交趾に至り、乃ち舶に附して海に循ひて行き、青州東萊に達した。此等沙門が或ひは渡天し或ひは東逝の途次にして交州に彼等の教へが及んだことは想像にやすい所である。晉洛陽の耆域卷十は、天竺の人であるが故國を出發し扶南に至り諸海濱を経て交廣を遍歴し並びに靈異ありしといひ、齊の求那毗地は中天竺より、矢張南海をへて入支したらしく、南海商人咸宗事之、供觀皆受、悉爲營法、於建業淮側、造正觀寺居之、重閣層門、殿堂整飾」と見え、南海貿易の獲得した財富が南朝佛教の支柱となつた一面を物語つて

る。

一面交州は邊鄙な所であるから沙門流謫の地ともなつた様である。白黒論を著し自ら佛教を非とした宋の慧琳については「琳既自毀其法、被斥交州」とあり、ある政治的事件に關與したと誣ひられた宋の智域は交州に擯せられたといふ。

最後に齊交趾仙山寺の釋曇弘について「晚又適交趾之仙山寺。誦無量壽及觀音經誓身安養。以孝建二年於山上聚。薪密往薪。中以火自焚。……爾日村民。咸見弘身黃金色。乘一金鹿、西行甚急。不暇喧涼。道俗方悟其神異。共收灰骨。以起塔焉。」とあり、この地方における佛教の弘布の一節を物語つてゐる。

(宮川尙志)